

テクノサークル「けんちくをつくる会」2017 年度活動報告

吉岡 寛之* 佐塚 将太**

Reports of Annual works of the Techno Circle “Tuku-Ken”

Hiroyuki YOSHIOKA*

Shota SAZUKA**

1. 活動の背景と目的

建築サークル「けんちくをつくる会」(通称つくけん)では、建築デザイン教育において体験しにくい実際に身体を使って原寸大の建築について考える機会を設けている。建築をつくり、空間を理解する一連の流れを体験することは、素材やスケールに対するリアルな感覚の獲得を促すと同時に、様々な生活の場面に対する観察力を育成することが期待できる。設計から実際に製作するまでの様々な段階の共同作業で各人の行動力や調整力の育成、学年の枠を超えた交流の場の形成が活動の目的である。

2. これまでのつくけんの活動

2011 年設立で 7 期目を迎え、毎年 3 年生が主体となり、春に活動内容を検討する。どこに何をつくるかも学生自身が検討し、実現のための様々な交渉も学生が行なう。限られた予算で「建築」を実際につくり、自らが決めたテーマで空間を創造し材料の特徴を考察し、実際に加工、組立までに至る方法を考えることを目標とする。近年は六角橋商店街の商店会と連携し、商店街イベントにあわせてイベント会場を設営している。どのような空間を創造するかは学生の自由であるが、初期の計画段階で材料の一つ選ぶことが挙げられる。限られた予算と、自らの加工や組立の技術に向き合いながら、材料の特徴を考える。これらを踏まえ、建築設計に取り組み、実際に立ち上げるプロセスを体験することになる。

3. 2017 年度の活動「仮設式バッファ空間キット」

7 年目となった 2017 年度は、自分たちの興味関心のある建築空間に着目し、それを再解釈した上で新しい建築空間としてどのように表現するかを課題とした。この新しい試みは作品それ自体の価値を見出すことを目指すと同時に、それが実際に置かれることによって可視化され、その場所や環境との関係性について考えることを目的とした。そこで日本の住宅にある縁側という空間に着目して、軒下の縁側空間は、心地良い日向となる快適な場所や庭のような外の風景を眺める場所として、自ずと人が居座りたくなる空間なのではないかと考える。この縁側空間のような外と中の間の緩衝空間に着目し、緩衝空間の要素を抽出したフォリーを制作した。単管によって構成される単純な四角い箱型のフレームに光や風が抜ける薄い布を

かぶせる。仮設であることを基本に繰り返し組み立てることを可能とし、様々な場所に居場所を作る。

このフォリーは「仮設式バッファ空間キット」と呼び、身体に寄り添うような空間の場を提供する。そこは縁側のような、外との間に 1 つレイヤーを挟んだような居心地の良い、落ち着いた空間となる。木が自由に立ち並ぶ森の中、砂浜が広がる海辺、在り来りな公園、閑静な住宅街など普段は居場所とは言えなかったところを切り取ることで、砂浜に流れ着いた流木や、何気ない段差のある場所などがベンチに変わることもあるだろう。今まで無かったところに居場所ができることでいつもとは違ったものが見えてくることを期待する。(写真 1234)



fig.1 山の中



fig.2 海辺



fig.3 住宅街



fig.4 森の中

4. つくけんの活動の成果

授業だけでは味わえない建築の魅力や面白さを多くの学生に実感してもらうことを重要としている。提案する建築のプロセスのすべてに学生が主体となり活動が行われる。今年度は昨年度と同様のメンバーを中心に活動が行われ、これまでとは違う新たな試みが行われ、建築への興味と関心がより深まっただろう。学生自身が試行錯誤し、建築空間をつくり上げ、様々な場所に置いて建築の意味や役割について考察を繰り返す経験は、これから建築を学ぶ上で貴重な土台となる。このような学生達の姿から、実際に「建築」をつくり上げる試みが座学では獲られない成果を見いだすことができる。社会に出て実際の建築に向き合ったときに、本活動の経験がわずかも学生の糧につながれば幸いである。

* 特別助教 建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture

** 学部生 4 年生

Graduate, Dept. of Architecture